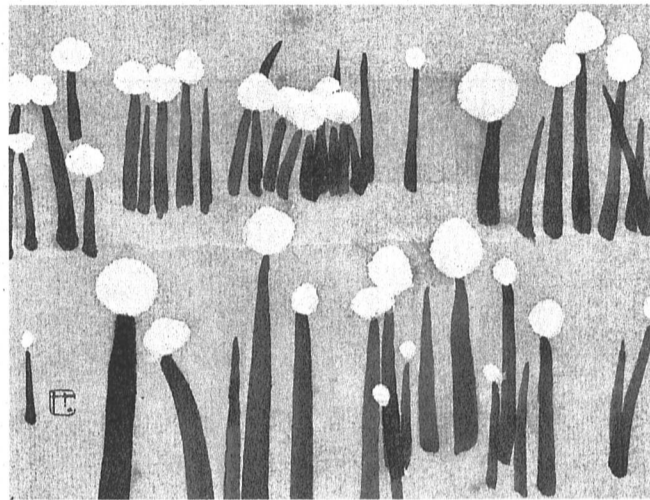


朝日 俳壇 歌壇



北村さゆり <ネギ坊主たち>

雨降れば母のるしあの子供の日 (大崎市) 宮嶋 孝
 吾の母も子の母もなき母の日よ (東京都中央区) 久塚 謙一
 毒の有無確かめ野草炊く五月 (奈良市) 藤岡 道子

【評】朝広さん。このが痛快。北村さん。「み」を思う。八島さん。マ

外階段上る劇場寺山忌 (海南市) 楠木たけし
 あぢさゝのふさぐ郵便配達路 (東京都世田谷区) 野上 卓
 泳ぎつつ残る決意の通し鴨 (浜松市) 尾内甲太郎
 (嘉麻市) 松井 春光

【評】一句目、麦が目の「なる」は地震。あんなに多弁だった小

母の日や我を案する文残る (越谷市) 新井高四郎
 麦の秋俳句で人と争はず (那覇市) 上江洲一石
 百一歳春蘭の歌人逝く (我孫子市) 渡辺 肇幸
 (八王子市) 額田 浩文

【評】一席。七十年席。豊かなご神体をた。句は「八十年の春」。

香水は捨てず使はず母百一 (東京府杉並区) 伊東 達子
 どしやぶりへ飛び出してゆく燕かな (松山市) 正岡 唯真
 屋敷の子今日はどこまで行つたら (境港市) 大谷 和子

【評】第1句。月形て一句誕生。第2句。

佐佐木幸綱選

蓬独活薇蕨野蒜露春の山菜の漢字いかめし

(つくば市) 小林 浦波
 亡き兄と同姓同名の人ありて春の叙勲の紙面に見入る (東京都) 鹿野 文字
 ふるさとの川に昔の勢いはなけれど水車遊ばせており (厚木市) 北村 純一
 街中を進む神輿の列止まる神様も信号待つ時代 (秩父市) 荒船 良孝
 ドラムスのリズムを皮膚で感じ取る聾学校の音楽の授業 (半田市) 森下 久子
 焼き芋屋昭和の声を追うように子らはスマホを閉じて列なす (東京都) 椿 泰文
 日に一度雑木の丸太満載のトラックはゆく新緑の道 (下関市) 内田 恒生
 荷車を牛車かはりに日毎牽き葵まつりに特訓の牛 (津市) 中山 道治
 古本屋が酒の安売り店になりビール日本酒洋酒が揃う (狭山市) 奥園 道昭
 妻と吾と犬も見上げるツバメの巣抱卵期間はみんなやきもき (福岡県) 末松 博明

【評】第一首、六種の山菜の名前を列挙した上句、なるほど、いかめしい漢字がなっている。第二首、亡き兄上と同姓同名だという。「見入る」のも当然だろう。第三首、子供時代によく遊んだふるさとの川なのだろう。

高野公彦選

連休の憲法、みどり、こどもの日、浮かれるなかれども瀬戸際 (札幌市) 田巻 成男

連休は時空を越えて旅をした地元の本屋とミニシアターで (名古屋市) 百々 奈美
 ☆兵たりし父の犯し罪ゆえかわが家に黄砂今年も多し (西宮市) 市橋 昌巳
 片言の「どうぞ」に席をゆづられて異国の人にも老いを証かざる (広島市) 金田 美羽
 武器持たぬ平和論など幻想と世界の二大大国示す (五所川原市) 戸沢大二郎
 連休のゴミ収集日休みなく働きくれる人も鴨も (観音寺市) 篠原 俊則
 真夏日と肌寒い日は繰り返し電気ストーブまだ居間に居り (横浜市) 桑田よし子
 道の駅に車中泊する人多く夜も混み合うその駐車場 (三郷市) 木村 義照
 わが町は元接取地ハロー坂、アメリカ坂とふ名のなほ残る (横浜市) 西前 敦子
 メロディを流し人間避けながらロボはスーパ一丸く掃きゆく (生駒市) 吉川 逸子

【評】1首目、三つの休日はそれぞれ<改憲の動き、緑地の衰退、少子化>などで存立が危うくなりそうだと、という憂い。2首目、遠出せずに連休を楽しんだ作者。3首目、中国に派兵された父を思う歌。4首目、作者の苦笑が伝わってくる。

永田和宏選

戦争を知る人なきを待てるかに日ごと高まる改憲の声 (加東市) 藤原 明

たくさんの人を殺せば売れる武器 武器を売るとはそう言う事だ (周南市) 松岡 哲彦
 ☆戦争が日常の色奪いゆくモノクロームのポテトチップス (奈良市) 山添 聖子
 五十年経し教へ子の同窓会戦争に行きし予一人もをらず (伊勢市) 橋本 輝久
 くり返す「ごろすけはう」はひたむきな愛の発露となりて残れり (中津市) 瀬口 美子
 ファミレスの給仕ロボット近づきつつい道ゆづるわれは人なり (加古川市) 畑 啓之
 少しづつ笑ひ声たてる日の増えあなた知らない時間を生きる (鹿嶋市) 大熊佳世子
 亡き妻の語りはじめの優しさや「そうね」といつも同意してから (館林市) 阿部 芳夫
 潮風が軽く背を押す十五度の船見坂より見る山桜 (札幌市) 伊藤 哲
 玉の緒の永く巡れる網の目を小胞体と呼ぶ(れからも (東京都) 柳沼 智景

【評】冒頭四首、今の時期にとても大切な歌だ。しっかり読んで覚えて欲しい。五首目、先ごろ亡くなった岡野弘彦さんを。十首目、細胞生物学会を中心にしてこの一年間、小胞体という細胞小器官の呼称の是非を議論し、当面そのままということに。

川野里子選

☆戦争が日常の色奪いゆくモノクロームのポテトチップス (奈良市) 山添 聖子

☆兵たりし父の犯し罪ゆえかわが家に黄砂今年も多し (西宮市) 市橋 昌巳
 ショキショキと髪切る音に身をまかせしだいに吾は樹木となりぬ(さいたま市) 松田 典子
 大橋に引つかかかっている太陽を海へシフトす特急電車 (加古川市) 冨家 新子
 駐車場シートカットの自転車が視界に入る蝶の如くに (高松市) 樋口淳一郎
 織る姿人に見せない鶴のよう夫はドア閉めストレッチする (福島市) 亀岡 広子
 高卒で働くと言う君の背は大きく見えるか細くも見える (市川市) 松丸 史佳
 「たいせつなものほどそととやさしくね」祭りを買ったヒヨコの遺言(厚木市) 本庄 伸子
 息子だなど分かった場所から動かすに見ている息子の一人の時間 (流山市) 坂本真衣子
 なんとなく受け入れ難い妻のことパートナーと呼んでる上司 (松戸市) 小林 里純

【評】一首目、まさか遠い戦争が色を奪うとは。二首目、かつての戦地から飛び来る砂に胸が痛むのだ。三首目、剪定されながら息づく樹木のように。四首目、ダイナ

俳句時評 石牟礼道子の「うた」

岸本 尚毅

「祈るべき天とおもえど天の病む」は石牟礼道子の俳句。祈るべき「天」さえ病んでいる。意味の上では暗澹たる作品だ。だが五七五の調へのゆえだろうか、必ずしも絶望一辺倒ではなく、病んでしまった「天」を慰藉しているかのような思ひも感じられる。

水俣出身の武良竜彦の近刊『石牟礼道子 たましいを浄化する文学』(コールサック社)は、石牟礼の文学の全体像を描出し、その一部に俳句があることの意味を問う。たとえば二〇一二年作の八月「影や水底の墓見えざりき」という句。石牟礼はダムに水没した村を素材にした小説「天湖」(一九九七年)を書いたが、その十余年後、小説よりはるかに簡素な俳句という形式に「水底の墓」への思いを再び託した。

石牟礼は表現の一つとして俳句を選んだ。その理由は「亡き魂たちを思つて『謡』のようなものを唱えることとしたかった」であり、たまたま俳句という形式を再び託した。

式が、余計な「近現代的な文学的要素」の入り込む余地の少ない形式であったことと「だ」と本書はいう。「石牟礼道子」として俳句とは、死者の魂に添って詠う「うた」であった(本書)。

「月影や水底はむかし祭りにて」(重んべの神々うたう水の声)など石牟礼の句はしばしば素朴だ。それは何を意味するのだろうか。死者に添って「うた」たらんとするとき、作者の「個性」や「独創」などといった「近現代的な文学的要素」は邪魔になりかねない。むしろ俳句という形式の素朴さが石牟礼の志向と親和的だったのだ。

第69回短歌研究新人賞 短歌研究社主催。水本麻衣さんの「いつも寝顔を褒められている」(30首)と、岡本恵さんの「影の名前」(同)に決まった。

◇朝日歌壇 入選取り消し 5月24日付の歌壇に掲載した「帰りたい帰りたいとふ入所者が家族が来ると何も言はない」は、類似した先行歌がありましたので、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、

